P8（裏表紙）

Kissako
for Trombone

Sawako Takeuchi

P1（表紙）

作曲を委嘱し、製作された作品。
モティーフにはSi♭-Do-Re-Mi-Faの音を使って緩やかな和声の移ろいを表し、次第に「京の四季」La-Fa-Miからの音形が現れ、反映される。感傷的なワルツから季節の巡りを表現しながら、躍動感溢れるモティーフへと変化していき、最後には回帰して明るさを伴って終曲する。

P.ゴーベール　交響的小品
Philippe Gaubert　Morceau Symphonique

フルートのヴィルトゥオーソであり指揮者・作曲家としてパリを中心に活躍をしたゴーベルによる小品。
パリオペラ座の首席指揮者として、作曲後数十年しか経っていないであろうフランク、フォーレ、ドビュッシーなどの管弦楽作品に多く触れたことが自身の作曲にも反映されており、豊かな色彩と和声を感じられる作品である。

F.レハール　喜歌劇「ジュディッタ」より "熱き口づけを"
Franz Lehár Giuditta: Meine Lippen, sie kuessen so heiss

メリー・ウィドウや微笑みの国など数多くのオペレッタを産み出したレハールが晩年に作った最後の作品。
地中海や北アフリカのエキゾチックな雰囲気がよく出た情熱的なメロディーが美しい悲恋の物語であり、このソプラノのアリアは第4幕で主人公であるジュディッタが魅力的に歌う。

P4

G.シモンズ　大西洋の風
Simons Gardell　Atlantic Zephyers

1978年（E.ライヒャと同い年である）にミシガン州で産まれたシモンズは、ストコフスキーの元フィラデルフィア管弦楽団に15年間、その後トスカニーニの元NBC交響楽団で首席トロンボーン奏者を務めた、現在も歴史的録音のなかでその演奏を聴く事の出来る人物である。
「大西洋の風」というタイトルが付けられたこの曲は、短編小説という意味を示すノヴェレッテの副題がついており、A.プライヤーの作品スタイルとダンスミュージックの要素が組み合わされた作品である。

E.ライヒャ　トロンボーン協奏曲 第2番 イ長調
Eugen Reiche Trombone Concerto No.2 in A major

ゴーベールがフランスで産まれた1879年の前年にドイツで産まれたライヒャは、8歳の時にヴァイオリンを習い始め、13歳からトロンボーンを始めた。ドルトムント交響楽団を経てサンクトペテルブルク交響楽団のソロトロンボーン奏者となり、1899年にロイヤルマリインスキーオペラのバストロンボーン奏者に転向したという多彩な人物である。
1902年に作曲されたこのトロンボーン協奏曲第2番はベルリン国立歌劇場のトロンボーン奏者としてベルクのヴォツェックの初演でも演奏をしたという名手P.ヴェシュケによって初演され、今日でもトロンボーンを演奏する者にとっては重要なレパートリーとなっている。

P5